資料４

令和３年３月１５日（月）
史跡米子城跡整備検討委員会

米子城跡史跡等活用専用駐車場予定地の遺構確認調査について

（１）米子城跡三の丸の現状

米子城は、天正１９年（１５９１年）頃に吉川広家が築城を開始し、関ヶ原の戦後、伯耆国１８万石に封じられた中村一忠によって、慶長７年（１６０２年）頃に完成したとされる、山陰で他に先駆けて築かれた本格的な近世初期の城郭である。中海に面した湊山（みなとやま）を中心に、中世の砦と伝えられる飯山（いいのやま）を取り込んで築かれた特色のある平山城で、天守をはじめ当時の建造物はすべて失われているが、城の縄張りや石垣などは往時の姿をよくとどめており、平成１８年（２００６年）に国史跡「米子城跡」に指定されている。

城郭は本市中心市街地の西側にあり、中海に面する標高９０．１ｍの湊山（本丸・二の丸・内膳丸（ないぜんまる））及び東側の飯山の独立丸陵を中心とし、丘陵裾部に三の丸、深浦郭（ふかうらぐるわ）、出山（でやま）が配されている。なお、深浦郭、出山は未指定である（三ノ丸は令和３年３月追加指定予定）。三の丸の大部分は既に市街化され、鳥取大学医学部附属病院のほか、ホテルやスーパーマーケット、ホームセンター、ガソリンスタンド等の商業施設が建設されているが、三の丸の中心部は昭和２８年（１９５３年）に市営湊山球場となり、大きな建物等の建設を免れてきた。なお、内堀は全域、外堀は全長の約２／３が埋め立てられ道路等になっているが、地割等の形状はよく残り、城郭の構造、武家地と町家の有り様等を理解できる箇所となっている。

（２）過去の調査履歴

米子城跡関係の発掘調査は、これまでに小規模な保存目的調査を含めて６６か所実施している。しかしながら、内堀内側の内郭については、平成２７年度（２０１５年）から行っている米子城跡保存整備事業に伴う内容確認調査以前は、病院建設や石垣補修工事の際に一部が緊急的に実施されたのみである。

米子城跡の内堀については、令和元年度に第５５次調査が行われ、三の丸大手筋の内堀にかけてのエリアにおいて、現地表面下約１．５ｍに内堀石垣とみられる東西方向の石列１条が確認されている。

この石列を挟んで南側（城山側）の層には造成盛土が厚く堆積しており、その上面には角礫を多く含む瓦溜まりが面的に広がっていることから、明治維新後に破却された建物の基礎及び廃材と推察される。三の丸の状況を示す絵図は、近世後期以降のものしか現存しておらず、近世前期の様子は不明であるが、後期の絵図では、この付近に米蔵や番所などが置かれていた状況が窺えるため、検出された遺構はこれらの建物の一部と考えられる。

（３）第５８次発掘調査概要

第５８次調査では、前述の過去の調査履歴に基づき、史跡等活用専用駐車場予定地内に７か所の試掘トレンチを設け、遺構確認調査を行った。

その結果、Ｔ１～３・５～７の６か所のトレンチにおいて現地表（旧湊山球場グラウンド面）下約 20～30 ㎝において黄褐色土による整地面（標高 1.7m）が確認され、面上から礎石やピット、溝などの遺構が確認された。

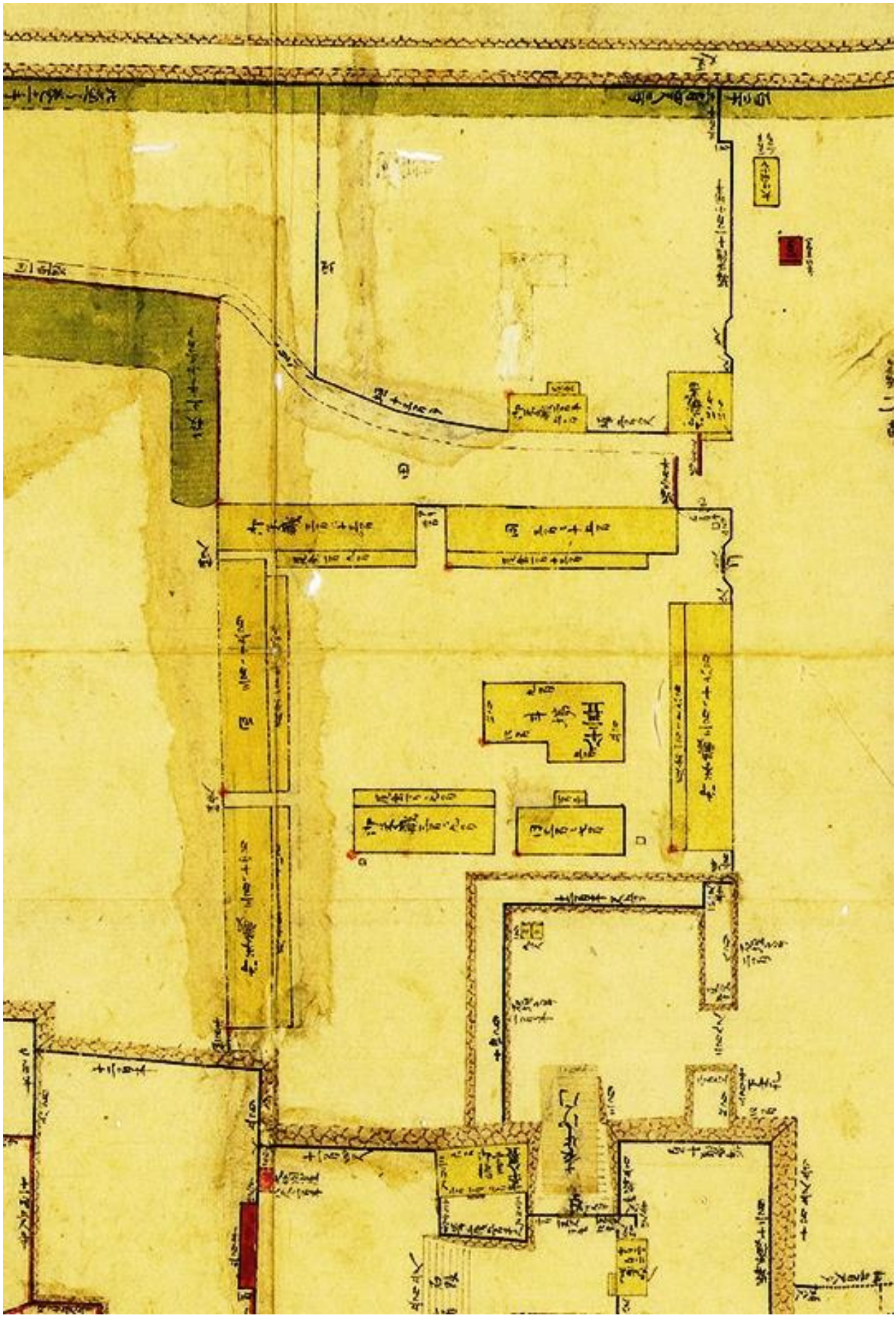
このうち、Ｔ３では東西方向の石列２条が確認された。２条の石列は南北 6.0m の幅で並行している。南側の石列は直径 100～60 ㎝の石を上面水平に、南側に面を合わせて、整地面を掘り込んで据えられている。北側の石列は直径 50～100 ㎝の石を上面水平に、北側に面を合わせるように、整地面を掘り込んで据えられている。さらに、この２条の石列の中央（南側石列から芯々で 210 ㎝の位置）に東西方向の礎石２基が確認された。以上の状況からこれらの遺構は礎石建物の一部と考えられる。同様の石列はＴ７においても確認された。

江戸末期に描かれた『米子御城平面図』には、二の丸枡形から北側の内堀にかけての三の丸大手筋付近に米蔵や番所等の施設が描かれている。位置や規模（南北三間）からＴ３、Ｔ７で確認された礎石建物は、これに描かれた「御米蔵」（三間×十五間）の基礎と考えられる。また、南側の石列南 200 ㎝に確認された東西ピット列は、絵図に「尾垂（オダレ）」と記された米蔵の庇部分の柱穴であり、北側の礎石列の北側 180 ㎝に平行して確認された深さ 20 ㎝の浅い溝は建物北側の雨落溝と考えられる。

この整地面上には、このほかＴ２では木材の残る柱穴２基、Ｔ６では礎石２基、Ｔ５では溝と柱材が確認されている。位置から絵図を基に推測すると、Ｔ２は「斗場」（計り場）、Ｔ６は「番所」、Ｔ５は「垣」に関連する遺構と推察される。
更に、攪乱により上面の遺構が確認できなかった部分において下層の遺構を確認した所、さらに下層にはそれより遡る時期の遺構面が重複して遺存している。

以上、今回の調査では表土下 20 ㎝に、江戸時代末期の遺構が確認された。このように、湊山球場、旧後藤グラウンド用地内においては米蔵などを中心とした、近世期の遺構が良好に遺存していることから、幕末期の絵図の信憑性が高く、今後の調査に資することが期待できる。

主な出土遺物（左から磁器碗、軒丸瓦、釘、蹄鉄）



『米子御城平面図』（部分・鳥取県立博物館蔵）

T3 礎石建物検出状況（南から）

T3 礎石建物検出状況（南から）

T3 礎石建物検出状況（北から）

T７礎石建物検出状況（南から）